



# 夢の本棚

発行所：松居直コレクション  
プロジェクト  
代 表：金戸 美紀予  
事務局：石川県小松市  
小馬出町10-3  
空とこども絵本館  
☎ 0761-23-0033  
bookrin@city.komatsu.lg.jp

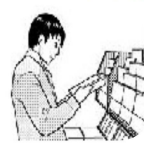


【活動方針】①絵本の楽しさを伝える <親子読書の奨励> ②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える <絵本文化の研究>  
③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える <絵本文化の継承>

世界に絵本を求めて④  
絵と日本語訳が合って物語の世界が見えてくる

## 書店で見つけた絵本

◆1950年代の初め頃だったと思います。神田の神保町のそばに「ナウカの書店」というロシア語の本を専門に扱っている本屋さんがあった、



ある時、ペラペラの紙に印刷した絵本があったんです。ロシア語なんか全く読めないのに、絵を通してストーリーが読めるんですね。3か月して行ききましたら、今度は日本語のものも陳列されてたんです。私は大喜びで買って、子どもに読んでやりました。子どもたちはもう、一回で『てぶくろ』が大好きになり、毎日毎日読まされました。◆そのたびに、子どもたちが絵を見ながらいろんなことを発見し

ていく。「あ、こんなものが描いてある。こんなところに」◆私は、子どもに教えられたんです。「一場面、一場面にいろんなサインが出てくる。とっても工夫されてるな」って。

## 共感して物語の世界へ入る

◆ラチョフって人は、ソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連）時代の人ですから、リアリズムの絵の名人なんです。けれども、そこで表現していることは、それを乗り越えた空想の物語の世界、昔話の世界へ子どもたちを引っ張り込んで行くんです。◆文章の中には冬とか寒いか雪が降るとかということは一言も言っていないです。にもかかわらず、これはほんとに雪が降って寒そうなんです。それをきくとラチョ

フはとらまえて、絵の中で生き生きと表現している◆だから、「寒い冬にみんなが一緒に入って良かったね」という共感を子どもたちがするわけですね。共感するということは、「ほんとだなあ」ってことを薄々感じてるわけです。嘘がほんとになるんです。これは事実ではないけれども、そこに非常に強く真実を感じて共感している。「共感をする」ーこのことが物語の世界へ入る力なんです。

## 本格的な読書の世界

◆最近、大人の方もファンタジーをよくお読みになる。でも、よく見ると、ストーリーを読んでらっしゃる。子どもってというのは、ストーリーの中に書かれている不思議さがい。そこへ入って行く。



読書してるんじゃない。物語体験をする◆文章を読み、その文章が表現している世界に実際に入り込んで行かないと読書はできない。「ふと世界に入り込む」というのが読書なんです。ですから、日本人の識字率は97パーセントぐらいですけど、読書率ってのは、本格的に読書ができるってのは、だいたい40パーセントくらいと言われています。

## 念願の日本での出版

◆ソ連の印刷があんまり良くなかったですから、私はソ連のお役所と交渉をしてモスクワの出版社からフィルムをお借りしました。日本語訳も内田莉沙子さんをお願いをして、日



エウゲニ・M・ラチョフ 内田莉沙子訳 1965年/福音館書店刊

本でようやく『てぶくろ』を出すことができました。

◆内田さんの日本語訳ってのは、訳されてるんじゃない、ほんとに日本の子どもたちに語るといふ気持ち。おじいさんは、明治時代の文豪の内田魯庵先生で、ドストエフスキを確か一番最初に日本に紹介された方だったと思います。そういう伝統があるものから、ロシア語も日本語もよく分かる。翻訳するのは、日本語が勝負ですからね。日本語が良くなければ、どんなに良い本でも子どもには日本で定着しないんです◆そういう点で、この『てぶくろ』は、ラチョフの絵と内田さんの日本語、それがピタッと合って子どもたちの間に生き生きとした物語の世界が作られるんです。言葉っていうのは、聞いて、感じて、考えて、思い描いて、というふうに行きまると、自分の中に生き生きとした世界が見えてくるんです。(つづく)